

性別役割規範システムの国際比較研究

——トルコ・日本・アメリカの大学生調査より——

吹野 卓*・片岡佳美*・Zeynep Çopur**・Tanya Koropeckyj-Cox***

International Comparative Study on the System of Gender Role Norms:
An Analysis of the Data from Student Survey in Turkey, the U.S. and Japan

Takashi FUKINO, Yoshimi KATAOKA, Zeynep Çopur, Tanya Koropeckyj-Cox

キーワード 性別役割規範、国際比較、メタ規範、トルコ、アメリカ

1. はじめに

本稿は、トルコ・日本・アメリカの大学生を対象とした質問紙調査データに基づき、性別役割規範の国際比較を行うものである。

国際比較研究においては、「比較」自体が可能であるための論理的な保証が必要である。特に複数の言語で作成された質問紙を用いた比較研究において、翻訳の妥当性の問題は、比較自体の可能性の根底に関わる問題である。

この翻訳の妥当性は、大きく2つに分けることができよう。すなわち(1)語感等の違いのために5点尺度などで測定された得点そのものでは直接比較できないという問題、すなわち「尺度的妥当性」、および(2)「言葉」が指し示している内容が異言語間では必ずしも一致しないという問題、すなわち「内容的妥当性」の2つである。

翻訳上の問題を解消するために、これまで

にも変数の得点(質問項目の反応もしくはそこから構成された尺度得点)を直接比較するのではなく、変数間の関係を比較すべきであることが提案されてきた。しかし、これは「尺度的妥当性」の問題の解決策であるに過ぎず、使われた変数(質問項目)の内容が異なる言語間で同じである可能性を高めるものではない。

そこで更に考えられるのが、各国内部での「『変数間の関係』の総体的なパターン」を意味をもったシステムとして記述し、そのシステム同士を国際比較するという方法である。ただし、この方法を実行するためには、(a)ある程度「内容的妥当性」が保証できる分類枠組みに従ってシステムを記述すること、および(b)システムとしての「意味」が解釈しやすいこと、が望ましい。

さて、本稿で行おうとする試みは、性別役割規範に関する分析である。上記の考察を踏まえたとき、性別役割規範には国際比較研究

本研究は科研費(25590113)の助成を受けたものである。

* 島根大学法文学部社会文化学科, ** Hacettepe University, Ankara, Turkey, *** University of Florida, Gainesville, FL, USA

の対象とする上で、以下のような有利な点があると言えよう。

(1) 男女という社会的区分はどの社会でも見られる普遍的なものであり、かつその境界が比較的明瞭な区分である（すなわち「内容的妥当性」が高い区分である）。

(2) 図1に示したように、「その規範の担い手（内面化している人）」と、「その規範が言及している行為主体」の組み合わせが単純明快である（たとえば、「女性は家事をするべきだ」と男性が思っている場合は、図1ではⅡの区分に該当）。この組み合わせは「変数間の関係」の相対的なパターンを比較検討していくための分類枠組みとして使用できる。なお本文中の分析では、操作的配慮から前者を回答者の性別、後者を規範対象者の性別と呼ぶことにする（吹野・片岡, 2013, 2014）。

		言及されている行為主体	
		男性	女性
規範の担い手	男性	I	II
	女性	III	IV

図1 規範の担い手と対象者の性の組合せ

(3) 上のIからIVの組み合わせを用いれば、「『女性は家事をするべきだ』と男性は思うべきだ」といった規範の規範、すなわちメタレベルの規範についても分析に含めやすい。また「男らしさ」を受け入れるかという問題と、その社会での「男らしさ」とは何かという問題を区別して分析することも可能である（片岡ほか, 2011）。

(4) 性別役割は、家庭と仕事といったどの社会でも何らかの解を必要とする問題にかかわるものである。また近代化に伴う伝統的男女役割からの離脱や男女間の役割の相補性といった特徴も想定可能で、規範間の関係の意味を理解し易い。

2. 調査について

用いた質問紙は、大きく3つの部分から構成されている。第1は仮想カップルを呈示した上でそれについてのイメージを尋ねた部分、第2はジェンダー・家族・結婚・子育てなどに関する意見を尋ねた部分、第3は基本属性と自己の性格に関する評価からなる部分である。本稿では、このうち主として第2の部分の分析を行う。この部分は、①家事貢献、家計貢献、結婚や子供を持つことに対する意識尋ねた項目（9項目）と、②様々なイシューに関して「男性はどうあるべきか」と「女性はどうあるべきか」をペアで尋ねた項目（44項目/22ペア）の計53項目からなっている。これらの質問項目は全て、「とても賛成」（5点）から「とても反対」（1点）までの5点尺度で測定している。

なお、分析で用いた回答者の性別や「伝統的だ」といった自己評価項目は第3の部分に属しており、こちらは7点尺度で測定している。

調査は2015年に、トルコの Hacettepe University、日本の島根大学、アメリカの University of Florida の大学生を対象として実施した。配布と回収は授業を通じて行ったため、ランダムサンプリングではない。回答者数は性別不明も含め計1,611人である。性別、男女別内訳は表1のとおりである。

3. 家事と家計貢献の平等

および性別役割肯定

まず問題提起も兼ねて簡単に、「夫も妻も、家事をする時間は平等であるべきだ」（家事の平等）、「夫も妻も、家計に貢献すべきだ」（家計貢献の平等）、「男性には男性の役割が、女

表 1 回答者の性別内訳(人)

	男性回答者	女性回答者	性別不明	計
トルコ	178	331	1	510
日本	306	221	10	537
アメリカ	169	393	2	564

性には女性の役割がある」(男女に役割)という3項目について、国別・回答者性別ごとの平均得点について見てみよう(図2)。

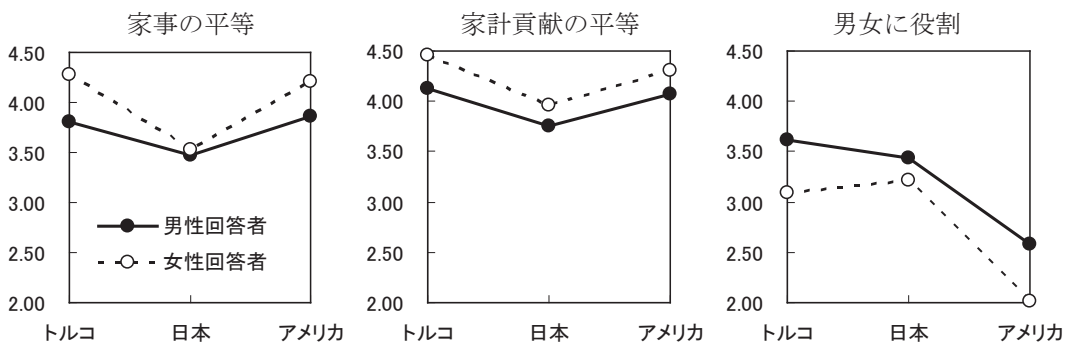
図2に示されているように、「家事の平等」および「家計貢献の平等」については、男女回答者とも日本の平均値が最も低くなっている(日本と他の2国の間に有意差あり)。また、「男女に役割」については、アメリカの平均値が低かった(アメリカと他の2国との間に有意差あり)。

とはいえ、国によって質問紙に用いた言語が異なり、このような国別の平均点比較については慎重になる必要があるだろう。前述したように、尺度を構成している言葉(「とても賛成」

など)の語感の違い、すなわち翻訳上生じる尺度的妥当性の問題があるからである。

一方、「家事の平等」に関しては、日本でのみ男女回答者間に有意な差がみられなかった。こちらについては、同じ言語内での比較であるので、上記のような問題は生じないと一応考えることができよう。

いずれにせよ、「家事の平等」については、日本の平均値自体は他国より低い、男女での一致度、すなわち男も女も「平等であるべきとはあまり思っていない」という点での一致度は高いと言えそうである。このような一致度の問題について次に考えてみよう。



	家事の平等			家計貢献の平等			男女に役割		
	トルコ	日本	アメリカ	トルコ	日本	アメリカ	トルコ	日本	アメリカ
男性回答者	3.81	3.47	3.86	4.13	3.76	4.07	3.62	3.44	2.57
女性回答者	4.28	3.52	4.20	4.45	3.95	4.30	3.10	3.21	2.01
	**		**	**	**	**	**	**	**

**：男性回答者と女性回答者の間の有意差 $p < 0.01$

図2 家事の平等・家計貢献の平等・性別役割肯定の平均値の国別・性別比較

4. メタ規範についての考察

ここで、メタ規範という概念を導入したい。たとえば、大学に所属している女性研究者を見ていると、専門でもないのに単に「女性」であるという理由からジェンダー関係の授業を担当させられたりしている。むしろ授業では「ジェンダーフリー的であるべし」と説くことが期待されるわけだが、その役を性別で決めるというのはアイロニカルな話である。さて、もし「女性ほど『ジェンダーフリー的であるべきだ』と思うべきだ」という規範があるとすれば、これは「規範」の規範、すなわちメタ規範の例であるといえよう。

ここではより一般的に、特定の 이슈について、「『こうであるべきだ』と思うべきだ」といったものをメタ規範と呼ぶ。この段階では、さして意味を持たないように見えるが、第1節で述べたように、規範の担い手と規範が言及している行為主体の組み合わせが明確な性別役割規範については、検討するべき意味を十分にもってくると思われる。

すなわち性別役割規範においては、「『女は××、男は○○であるべきだ』と女は思うべきだ」というメタ規範と、「『女は▽▽、男は□□であるべきだ』と男は思うべきだ」というメタ規範を分析的に区分することが容易である。なお、この例は『女は××、男は○○』という形の規範内容になっているが、男女平等という規範内容であれば『男も女も△△であるべきだ』と記せよう。

上記を踏まえ、ここで次の2つの問題を建てたい。すなわち、①男性向けの『』の中身と女性向けの『』の中身が同じであるかどうかという問題（規範内容の一致／不一致）。そして、仮に『』の中身が男女で一致しているとしても、②そのメタ規範が男女において

同じくらい強く内面化されているかという問題（規範強度の一致／不一致）である。

この2つの問題に関して、トルコ・日本・アメリカの間になんらかの差異があるとしたらならば、それを我々のデータからどのように捉えることができるであろうか。

先に述べたように我々の質問票には、ペアになった質問項目が含まれている。その1つである「男性は、妻と子どもをまもるべきだ」と「女性は、夫と子どもをまもるべきだ」のペア項目について、トルコと日本の男女回答者平均値を示したのが図3である。例えば「トルコ男性回答者」では、「男性は、妻と子どもをまもるべきだ」という問への回答の平均値は4.48、「女性は、夫と子どもをまもるべきだ」へは平均4.45となっており、横線はこの2つの数字を結んだものである。

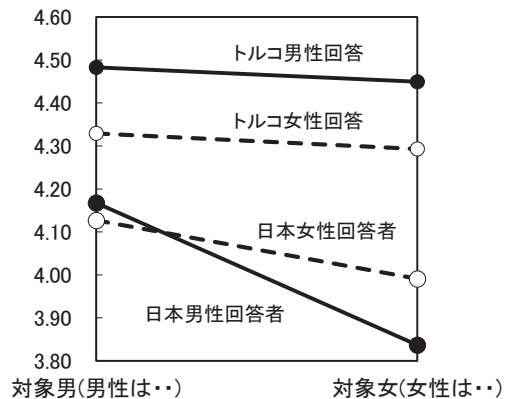


図3 「家族をまもるべき」の平均値
(トルコ/日本、男女別)

ここで、上の方にある「トルコ男性回答者」と「トルコ女性回答者」の線が平行であるのに対し、下の日本の男性回答者と女性回答者の線は平行ではないことに注意していただきたい。これは日本では、男性回答者が思っている「男はどうあるべき、女はこうあるべき」は、女性回答者が思っているそれとは異なっていることを意味している。従って、男女で

表2 規範強度の不一致と規範内容の不一致の検討

	トルコ	日本	アメリカ
22 ペア項目中で交互作用が有意だったペア数 (%)	8 (36.4%)	5 (22.7%)	2 (9.1%)
53 項目中で回答者男女差が有意だった項目数 (%)	32 (60.4%)	24 (45.3%)	34 (64.2%)

規範内容が異なっていることが示唆されていると見てよいであろう。一方、平行線になっている、トルコの男性回答者と女性回答者とは「男はこうあるべき、女はこうあるべき」という規範内容の点ではほぼ一致していると考えてよからう。さて、日本の男女回答者の例のように平行でないときには、「回答者の性別」と「規範対象者の性別」の組合せが平均点の高低と関係しており、2元配置の分散分析を行った場合に交互効果が観測されることになる。この交互効果の有無から先に述べた問題の①、すなわち規範内容の一致／不一致の程度を捉えられると思われる。

再び、「トルコ男性回答者」と「トルコ女性回答者」の線を見ていただきたい。この2本の線は、傾きはほぼ同じであるが、その高さが異なっている。すなわち、トルコでは男性の方が女性よりも「男女とも家族をまるめるべき」とより強く思っていると言えよう。ここでは、このような男女回答者の差異、すなわち平均値の男女差の有無から先に述べた問題の②、すなわち規範強度の一致／不一致の程度を捉えることとしたい。

まとめると、ペア項目における交互作用の有無から規範内容の一致度を、各項目の平均値の差の有無から規範強度の一致度を捉え、3カ国の性別役割に関するメタ規範のありようを考察できるのではないと思われる。

国別に比較するという大きな眼で眺めるためには、できるだけ様々な 이슈に関わる規範から捉えることが望ましいであろう。我々の質問票に含まれる項目は、必ずしも網

羅的なものとは言えないが、ある程度多岐にわたる 이슈について尋ねている。我々の質問票のなかで、ペア項目の交互作用が有意であった数と、各項目への回答の男女差が有意であった数はどのようになっているであろうか。表2はその結果を示したものである。

表2に示したように、22対のペア項目について、回答者性別と規範対象の性別に5%水準で有意な交互作用が見られたペア数は、トルコ、日本、アメリカの順になっており、特にアメリカで規範内容の男女での一致度が高いことが示唆される。

また、全部で53項目ある質問項目のうち、トルコとアメリカでは6割以上の項目において回答者の性別による平均値の差が有意なものであった(有意水準5%)。それに対し、日本で回答者性別で有意な項目は45%に留まっている。すなわち、日本はトルコとアメリカに比べ、一定の性別役割規範に従うべきという規範の強度の男女差が小さいと示唆される。

各国の特徴を整理すれば、以下のことが推測される。

トルコでは、様々な 이슈に関して「男はこうあるべきだ、女はこうあるべきだ」というイメージが男女間でかなり異なり、かつ仮に一致としていてもそう思う程度が男女で異なっている。すなわち、ここで言うメタ規範の内容と強度が男女で異なっており、そうであるなら、性別で異なる以上これはメタレベルでの性別役割規範が存在していると言ってよいと思われる。これは男の世界と女の世

界に距離があることを示しているのかもしれない。

日本では、様々なイシューに関して性別役割規範に従うべきだという規範強度の男女差が少ない。ただし、規範の内容についての男女差はアメリカより少し大きい。冒頭の家事と家計貢献の分析で見たように、平均得点を比べると日本は他の2カ国よりも男女平等意識が低いように思われる。とはいえ、男女に役割があるということについての男女での意識の違いは小さいと言えよう。これは、男女平等な社会を築くという方向での契機が少ないという帰結をもたらすかもしれない。

アメリカでは、性別役割規範の強度は男女で大きく異なるが、その規範内容については男女間で差が小さい。すなわち、男らしさ・女らしさについてのイメージは男女差が少ないにせよ、それをまもるべきかについての性差は大きく、男女平等社会実現への方向性が女性リードで行われていることを示しているのかと思われる。

ここまで、メタ規範という概念を用いて、3カ国の特徴を明らかにする試みを行った。ただし、分析手法等は全く不完全なものであり、仮説呈示に留まるものとして見て頂きたい。

以下では、諸変数間の関係について、もう少し詳しい検討を加えたい。

5. 性別役割規範の分類

既に述べたように、我々の質問紙には、様々なイシューについて「男性はどうあるべきか」と「女性はどうあるべきか」を対にして尋ねた項目が22ペア含まれている。これらのなかで、規範対象者の性、すなわち「男性は・・」と「女性は・・」の回答に差がある場合には、

男と女で違う役割が期待されていると理解することができよう。

対応のあるサンプルのt検定の結果、22ペア中20ペアで有意差がみられたが、その中でも特に差が明確なものから10ペアを選び、規範対象者が男性ほど高い得点の場合には、男性に関する質問項目を、逆の場合は女性に関する質問項目を変数として使用することにした。たとえば、「男性は、きれいで魅力的であるべきだ」と「女性は、きれいで魅力的であるべきだ」のペアに関しては、「女性は」の方が得点が高かったので、そちらを変数として使用するといったようにである。

3カ国全てのデータを対象としてこのようにして選択した10変数に因子分析を行った結果、固有値1以上の因子が3つ抽出された(表3参照)。第1因子は、母親は育児や家事のために仕事を犠牲にすることを求める変数と関係が強いので、「母親役割重視」と名づけることにする。第2因子は、男性に強さを求める変数と関係が強いので、「男性強さ重視」とした。第3因子は、女性には魅力を男には力仕事を求める変数と関係が強いので、「性差重視」とした。

我々の質問紙に含まれる質問項目が網羅的である保証はないものの、これらの3因子は様々なイシューにまつわる性別役割規範を構造的に捉えて分析を行う上での足がかりとして使うことができるであろう。したがって、以下ではこの3因子を性別役割規範の3分野として、分析を進めたい。

なお、これら3つの因子得点の国別・性別平均値も参考のために表4に示してある。ただし、再三述べているように翻訳上の問題もあるので国別の相違については慎重に見る必要がある。

表3 性別役割規範に関する諸変数の因子負荷量

	母親役割重視	男性強さ重視	性差重視
家事・育児ができるよう、妻は自分の労働時間を減らすか、パートタイムで働くべきだ。	0.81	0.04	0.08
妻は家庭にずっといて子どもを世話し、夫はフルタイムで働くべきだ。	0.66	-0.12	0.14
母親は、たとえ職位が下がったり低い賃金の仕事になったりしても、子どもを最優先すべきだ。	0.51	0.16	0.04
幼児の母親がフルタイム勤務の場合、その子は犠牲になりがちだ。	0.32	0.04	0.20
男性は、決める力を持つべきだ。	-0.01	0.70	0.09
男性は、妻と子どもをまもるべきだ。	0.12	0.69	0.13
男性にとって、経済的に自立していることは大切だ。	0.01	0.59	0.17
女性は、きれいで魅力的であるべきだ。	0.15	0.13	0.98
女性にとって、体型を維持することは大切だ	0.14	0.36	0.51
男性は、家庭で力のいる仕事を任されるべきだ。	0.15	0.13	0.20

最尤法：バリマックス回転

表4 各因子得点の平均値

回答者性別	母親役割重視		男性強さ重視		性差重視	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
トルコ	0.53	-0.09**	0.00	0.19*	0.37	0.45
日本	0.19	-0.24**	-0.51	-0.45	0.11	-0.05*
アメリカ	0.12	-0.22**	0.31	0.35	-0.24	-0.51**

アスタリスクは男性と女性の平均値の差の検定 *：p<0.05 **：p<0.01

6. 性別役割規範に

係わる諸変数の連関の比較

次に、上記の性別役割規範の3つの因子の規定因についての考察を進めたい。

第3節で「男女に役割」という変数として紹介したように、質問紙には、「男性には男性の役割が、女性には女性の役割がある」という項目が含まれている。なお、このような項目に対し否定的な回答であっても、たとえば「女性は『男女に役割がある』ことを否定するべきだ」というメタ規範が存在すると考えることもでき、即座に性別役割規範とは無

縁であるとは判断できないことも留意しておきたい。

質問紙にはまた、自己についての評価項目として、「伝統的だ」「家庭志向だ」「野心的だ」を7点尺度で尋ねた項目が含まれている（肯定的回答が高得点である）。これらの項目も具体的に男女での役割分担の問題に直面した場合に、その役割分担に関与してくる可能性があると思われる。

なお、「男女に役割」の平均点は、全ての国で男性回答者の方が女性より有意に高かった。また「伝統的だ」については、トルコでは男性が、日本では女性が有意に高かった。

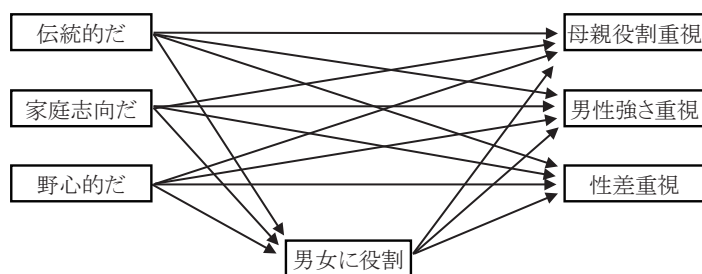


図4 分析モデルのイメージ

この4つの変数では、各国の男女差にそれ以外に有意差があるものは無かった。

以下では、性別役割規範の3因子と、これらの諸変数の関係について、基本的に図4のような関係図式を念頭において分析を行っていく。不完全のものではあるが、諸変数が関連しあったシステムとして把握し、その回答者の両性間で差異や一致の様子をもって国際比較を行う試みとしてである。

ただし、国別・男女別にそのパターンを捉えたいという本稿の目的からすると、パス図で示すと6通りの図になり、係数も入ると極めて煩雑なものになる。そこで、2段階に分けた重回帰分析結果を表として示しつつ、それをできるだけ読み取って行くことにしたい。

まず第一段階として、図4の左側の3変数間を独立変数とし、「男女に役割」を従属変数とする重回帰分析の結果からみてみよう。

表5で比較的大きな係数が示されているの

は、アメリカの「伝統的だ」が「男女に役割」に及ぼしている効果である。アメリカの大学生において男女に役割があると主張することは、古い価値観だという意識が存在していることを示しているのかもしれない。一方で、トルコの男女および日本の男性で両変数に有意な関係がないことは、このグループでは、男女で役割があるという意識は古風なものとは見なされていないことを示唆している。

また、日本の男性において「家族志向だ」が「男女に役割」に負の効果を示しているが、これは日本の男性原理は仕事中心主義的であり、かつ仕事と家庭が相反するものと認識していることを反映しているのかもしれない。同様に、トルコの女性で正の効果が見られることは、家族中心の女性原理と男女で役割があるという意識が整合的であるためかもしれない。

次に第二段階として、「伝統的だ」・「家族志向だ」・「野心的だ」・「男女に役割」の4変

表5 「男女に役割」を従属変数とする重回帰分析（標準化回帰係数）

回答者性別	伝統的だ		家族志向だ		野心的だ	
	男	女	男性	女性	男性	女性
トルコ	0.15	0.05	0.07	0.18**	-0.03	-0.02
日本	0.05	0.24**	-0.17**	0.08	0.04	-0.08
アメリカ	0.43**	0.39**	-0.03	0.07	0.13	-0.13**

* : p<0.05 ** : p<0.01

表6 性別役割規範の3因子を従属変数とする重回帰分析(標準化回帰係数)

	回答者性別	母親役割重視		男性強さ重視		性差重視	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性
トルコ	男女に役割	0.24**	0.20**	0.02	0.05	0.21**	0.12*
	伝統的だ	0.23**	0.17**	-0.04	-0.07	-0.08	-0.03
	家族志向だ	0.22**	0.06	0.07	0.19**	0.16	0.09
	野心的だ	-0.10	-0.08	0.08	0.02	0.19*	0.13*
日本	男女に役割	0.34**	0.25**	0.27**	0.24**	0.24**	0.21**
	伝統的だ	0.01	0.14*	-0.04	0.06	0.05	-0.12
	家族志向だ	-0.07	0.03	0.22**	0.21**	0.00	0.05
	野心的だ	0.07	-0.16*	0.02	0.05	0.11	0.07
アメリカ	男女に役割	0.34**	0.24**	-0.11	-0.06	0.34**	0.24**
	伝統的だ	0.25**	0.11	-0.03	0.07	0.11	0.12*
	家族志向だ	0.10	0.18**	0.04	0.10	0.08	0.08
	野心的だ	-0.07	-0.19**	0.18*	0.20**	0.03	0.10

* : p<0.05 ** : p<0.01

数を独立変数、性別役割規範の3因子のそれぞれを従属変数とした重回帰分析の結果を示したのが表6である。

トルコにおいては、「母親役割重視」が両性とも「伝統的だ」という自己評価と関係していることが特徴である。トルコの大学生にとっては、母親が仕事を犠牲にして育児を優先すべきだという考えは古風な価値とみなされているようである。また「家族志向だ」という自己評価が、男性では「母親役割重視」に、女性では「男性強さ重視」に正の影響を及ぼしている点も注意を引く。この部分については男性が女性に求めるものと、女性が男性に求めるものが食い違いつつも相補的になっている可能性が覗かれる。

日本の特徴は、「男性強さ重視」に対し、男女とも「男女で役割」が有意な正の効果を持っていることである。正の効果ということはむしろ、「男には男の役割があり、女には女の役割がある」と思っていない人たちは男性的な強さを求めているということでもある。また、両性とも「家族志向だ」とも正の

関係を示している。だとしたら、日本の大学生にとって、男性が意思決定や経済面でリードし家族をまもるということは、持って生まれた男性の特性というより家族のために担う単なる役割として認識されているのかもしれない。ちなみに、表4に示したように、日本の男女における「男性強さ重視」の因子得点の平均値は、他の2国に比べかなり低いものであったことも付記しておく。

アメリカにおいては、「母親役割重視」に肯定的なのは、男性では自己を伝統的だとみなしている人であるのに、女性では家族志向であり野心的でない人だという男女での違いが存在している。ここで気づかされるのはむしろ、他の2国では女性の家族志向が「母親役割重視」と結びついていないことである。3カ国中最も職業上の男女平等が進んでいるのではないと思われるアメリカの女性大学生においてのみ、家族志向が育児のために仕事をひかえることに影響を与えていることは興味深い。

7. 結 び

以上、トルコ・日本・アメリカの大学生から収集したデータを用いて、性別役割規範を巡る国際比較を試みた。ここであえて「巡る」という表現を用いるのは、個々の規範項目について、その得点の高低を単純に比較するのではなく、規範の規範であるメタ規範や、性別役割規範の分類、そして伝統志向性や家族志向性との関係も含めた規範システムの相違として国際比較を行おうとする試みだからである。

むろんその試みは極めて不完全なものである。また本文中で述べた各国の特徴をここで再びまとめることも避けるが、これは煩雑になるからというよりも、全体を見渡して各国の特徴を適切に摘出するための道筋が現段階では見えていないことによる。

おそらくここから先は、今一度各国の事情に通じた研究者が情報提供を行いながら深く検討する必要があるであろう。幸い、我々の研究チームはこの3カ国それぞれからの研究者からなっている。

また、本稿で扱ったのは質問紙に含まれる一部の項目に関する分析に過ぎない。残され

た大きな部分は、仮想的なカップルについて、各国の回答者がどのようなイメージを抱くのかに関するものである。こちらにおいても、分析結果の「意味」をきちんと抽出するための工夫と努力が更に必要となると思われる。

本研究は、トルコ・日本・アメリカという、文化的背景を大きく異にする社会の比較研究である。特にトルコと日本の比較研究は極めて少ない。この点での価値も最後に指摘しておきたい。

引用文献

- 片岡佳美・吹野卓・Tanya Koropeckyj-Cox・Zeynep Çopur, 2011, 「性別役割規範意識構造の国際比較研究についての考察」『社会文化論集』7, 85-94.
- 吹野卓・片岡佳美, 2013, 「性別役割規範システム把握に向けての方法論的検討：文化の国際比較研究を目指して」『社会文化論集』9, 49-60.
- 吹野卓・片岡佳美, 2014, 「性別役割規範の担い手の分節状況についての考察：国際比較研究を目指して」『社会文化論集』10, 1-8.